

あるいは勝つこともあろう、負けることもあろう。それが現実の姿である。それにもかかわらず物事が自分に都合よくはこばれてゆくように一生懸命に祈る、奇蹟を期待する。それが昔の上俗の心情であつたらうし、現在も残っているかも知れぬ。とにかく寺に説教があつても参る人はなく、お百段をふむ人も見かけず、千巻心経の誦も今はあまりきかない。

数々の庵寺が消えてゆこうとしてゐるやうに、昔の信仰上のならわしもまた消えさつていこうとしてゐる。

ここで実例を一つあげよう。それは津志河川の福巖寺の現況についてである。この寺は天正年間創立で寺歴も古く、最近までは堂々たる一ヶ寺の構えを見せていたが、今は住職もいなけれは僧もいぬ。堂宇は朽ちて雨は漏る。江國寺の住職がこの福巖寺の住職を兼ねて、辛うじて寺の体面を保つてゐるが、果してこのやうな状態がいつまでつづくであらうか。近い将来必ずす変革が来るやうな気がする。

こうした一連の推移を、女ながち現代人の信仰心の低下とは云いきれまい。世は進んでいる。昔は神佛に祈願するより外に、どうともなし得なかつた事が、今日では科擧の力で解決出来ることが多い。一部の識者の間では人間死後の葬式の是非無用論がなされてゐる現今である。信仰は美しい事であり大切な事であるが、現代人には昔の人達の信仰を無批判にうけついで行くことは出来な事であらう。

去りゆくもの、消えゆくものへの遺憾の情をもつて、私は亡び行く堅田郷の庵寺をとりあげ、その解明をこころみて来たが、所詮これは群盲が象をなでるの類い、どうかたが私の足らざるを補い、いや誤りを正して下されば幸いである。(終)

(奉天を愛・依伯市下堅田津志河川)

覺書

木立雑記

高水嘉吉

(住所 依伯市藤原)

はじめに

石松正木君は旧姓本矢、木立の出身で私の師範学校時代の同級生である。目下別府市朝見町二丁目一ノ九に住まわれている。先日来信あり、以下に掲げる稿を寄せられた。木立のことがあれこれ記されていて興味深く読んだ。木立は出向いて実地を確かめたいと思つたが、雜事に煩らわされて出来ぬまま、とり敢えず転記して皆さんの参考にすることにした。後日実地踏査をしたいと思つてゐる。

木立の開祖

昔、侍六騎が御屋本で生活をはじめた。(木立の人にはミヤンモトと言つてゐる) しかし津浪が起り、波瀾が強くして生活し難かつたので、異地なる大野原に移り(現今の大野と原)、安全な土地を選んで永住の地とした。これが木立の開祖である。

これは本矢家に言い伝えられたことであるが、部落の古老も亦これを語り、原部落の兒王佐四郎翁も話してゐた。木本ヨシの先祖は御膳山(山麓、本田待佐の先祖は野原口の益宗林の内、小川六次郎の先祖は妙見山麓の小才女川の邊り、久保理吉の先祖は山奥の窪地、新名利八の先祖は大樹あり竹藪ありて安全なる地帯、本矢劉吉の先祖は自然林の大樹あり竹藪のある安全なる地帯に居て

定めたことである。

侍六騎は源義頼が豊國に下向し左時に随従し左が、戦に馴れず困苦に耐えずして脱落したものが、或は壺の浦で四散した平氏の落武者が、定かでないが凡そその時代の人と思われる。墓石に約七百年前のものと思われる。型の土ムがある。

### 水立の今昔 ― 地形から見た ―

水立の地名に、波越峠、岸の上、岡山、沖岡、波切、津久良田等があるが、皆水に關係したものである。

水立の低地は昔は又を海だつたと思われる。岩石に海岸の荒波に浸蝕された跡が見られるし、本矢劉吉が妙見社に奉納した鼻線岩はその代表的なものである。七百年の昔侍六騎が御屋本に流れ着いたのもおし得たことである。水立川の五反田まで舟が通行したとは、田西甚平翁の語るところであり、明治の末頃までは土井橋まで舟が来て、佐伯町に往復していた。

### 水立の名字

以下は兒玉佐四郎翁の語つたことである。

世は御一新となり、庶民に名字即ち姓を賜あるようになった。新名利八は新しく名を戴いたから新名とつけた。小川嘉六は家々近くに小々な川があつたので小川とつけた。他の家は昔からある古い家だから古い文字の名をつけた。本矢、本田、木本、久保などである。うちには佐四郎翁のこと、小女玉があつたから兒玉とつけた。ところか近所の人「それはよい名字」と言つて兒玉とつけた。それで原部落には兒玉姓が多い。明治維新の際、庶民に姓氏をつけさせ左事情が決られて面白い。

### 妙見社

或る年疫病が流行した。六部さんから聖地を遂定してもちつて妙見社をお祀りした。エ事が完了し、祭事はすんだので部落民が六部さんを見送つた。ところが松浦峠の中敷で六部さんを見失つた。六部さんは脚が速いので部落民はついて行けなかつたのである。村人一同は「六部さんは神様であつたであらう」と語り合つたといふことである。

### 天神社

落雷が多くて農作物を荒らして困るまで、天神様をお祀りした。それから落雷が少くなつた。これは天神社の起源についての伝説である。

覚書

### 相江港 (其の三)

山田善市

(住所 佐伯市下堅町相江)

私の祖父善右工門は、相江港最後の船主として、第一、第二福壽丸、三艘の船で京阪との交易をやつていたが、明治二十六年頃止めてしまつた。私の生まれる前に故人となつてい左ので昔の様子を聞くことが出来なかつたのばかりだが、祖母が元氣で八十八才まで長命し左ので、色々と昔語りをきくことが出来た。

その祖母の話によると、相江港の正月行事に「衆初め」と「当元(村祈禱)」と「龍王権現の祭」と三つが盛大な